

## NEWS

## 「開港のひろば」

編集・発行／横浜開港資料館（財）横浜開港資料普及協会  
発行日／平成9年10月29日（水）

Number  
58

横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100  
印 刷／中川印刷株式会社



グッチョウ商会 明治7年(1874)頃。現在の山下町92番地にあったドイツ系商社。

## 企画展

# 「横浜の外国商館 —貿易商社の源流」



アーレンス商会の商標

横浜は、江戸幕府がアメリカ、イギリスなどの五カ国と結んだ通商条約に基づき、安政六年六月二日（一八五九年七月一日）外國貿易のため開港された。この条約では、外國商人は日本の国内で自由に活動することはできず、横浜や神戸・長崎など、条約で定められた開港場でのみ商取引を行ない、そこに設けられた居留地という特定の地域でのみ店舗や住宅を構えることが認められていた。横浜の場合、現在の山下町と山手町が居留地だった。外国の商社はこのように窮屈な状態に置かれていたにもかかわらず、

明治時代を通じて、横浜港貿易をリードしていた。幕末の通商条約のもとでは、「領事裁判権」といって、事件の被告になった場合、自分が所属する国の法律と領事法廷で裁判を受けられる権利があり、それで守られていたことがあるが、それだけではない。貿易に欠かせない海運会社・銀行・保険会社、それらを活用するための知識や経験、世界に張りめぐらされた商社間のネットワーク、情報と資金と商品の流通のすべての面で、外國側が主導権を握っていたのである。日本の商人たちは、当時「商館」と呼ばれた外國商社としばしば争いつつ、かれらとの取引を通して、貿易のノウハウを学んでいった。そして大正時代頃になってようやく貿易の主導権を握ることができようになったのである。

「旧条約」と呼ばれる幕末の通商条約は、明治三二年（一八九九）に施行された改正新条約に取つて替わられ、居留地や領事裁判の制度も廃止される。しかし、外國商社の活動が急に衰えたわけではなく、大正一二年（一九三三）の関東大震災によって、横浜の港や都市の機能が大きな被害を受けるまでは、比重を低下させながらも伝統が保たれていた。今回の展示では、開港から条約改正までを中心としつつ、関東大震災までの時代をも念頭において、横浜に存在した外國商館の全体像や、その実態を知るために基本的な資料を紹介する。

（斎藤多喜夫）

# 「横浜の外国商館—貿易商社の源流」

## ハード商会文書

開港後、横浜に最初に進出した外國商社は、「英一番館」という名前から受ける印象や、当時東アジアで最大の商社だったところから、ジャーディン・マセソン商会だという俗説が存在するが、事実はそうでない。

最初に商船を派遣したのはハード商会というアメリカの商社で、船の名をウォンダラー号という。その代理人をドアといい、アメリカの神奈川駐在の初代領事だった。ウォンダラー号は、総領事から公使に昇格したハリスが乗ってきた軍艦ミシシッピ号といっしょに、開港前の安政六年六月一日（一八五九年六月三〇日）に入港したのである。入港手続きは条約発効期日の翌日に行なっている。

ハード商会とは、アメリカのマサチューセッツ州出身の商人、オーガスティン・ハードが一八四〇年、広東に設立した貿易商社で、一八五六年に香港に本店を移していた。当時東アジアで最大のアメリカ系商社をラッセル商会といい、オーガスティン・ハードも、「アメ」をして知られる横浜のウォルシュ・ホール商会の設立者トーマス・ウォルシュもその出身である。ハード商会は一時有力商社になるが、一八六〇年代以降衰退し、明治九年（一八七六）中には横浜から撤退する。



スミス・ベーカー商会の商標



ジャーディン・マセソン商会の商標



シベル&プレンワルトの商標



クニフラー商会の商標

初期の活動は、アメリカに帰化した漂流日本人、ジョセフ・ヒコの自伝『アメリカ彥歴自伝』（中川努／山口修訳、平凡社東洋文庫）や、次に述べるハード商会文書によって知ることができる。なお、ハード商会に関する参考文献に、福永郁雄「オーガスティン・ハード商会」（横浜開港資料館「横浜居留地の諸相」所収）がある。

ハード商会の活動記録はハ

リーニューブラリーより寄贈を受けたハード商会横浜店の平面図（写）や、初代代理人ドアと二代目フィールドの商用書簡、中国人買弁との契約書の複製を展示する。

また、今回の展示ではベーカー・クニフラーより寄贈を受けたハード商会横浜店の平面図（写）や、初代代理人ドアと二代目フィールドの商用書簡、中国人買弁との契約書の複製を展示する。

は、開港当日に入港したシラー号で、オランダの保護下に来日したドイツ商人クニフラーである。幕府が用意した外国人用の貸長屋を借り、六月一七日（陽曆七月一六日）に店を開いている。福澤諭吉が筆談で蘭英会話書を買ったという「キニッフル」がこの人に当たる。この人が日本で設立したクニフラー商会の業務は、その後イリス商会に継承され、現在に至っている。

展示では、クニフラー商会の商標

後継商社であるイリス商会の社史、社員集合写真、商標などが紹介されている。クニフラーに関する参考文献には、「イリス商会百年史」、部下だった人の書簡を編集・翻訳した生熊文『ギルデマイスターの手紙』（有隣新書）がある。

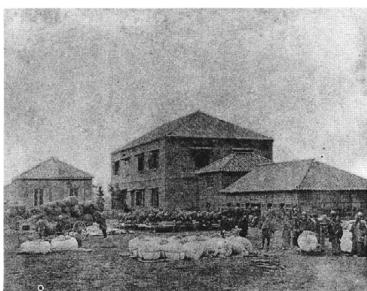
## 外国商館の商標

今回の展示では、外国商館の商標類を集めたコーナーを作る。それらを見ていると、横浜にあつた外国商館のおよその全体像が浮かんでくる。まず、ジャーディン・マセソン商会は、当時東アジア最大の英國系商社で、香港に本店を置き、横浜店はその敷地の地番から「英一番館」として知られた。開港当初はデント商会やサッスーン商会などの英國系巨大商社も横浜に進出したが、ジャーディン・マセソン商会以外は定着しなかつた。

横浜居留地の多数派は、クニフラー商会のように、日本で設立された多様な国籍の中小商社である。それらの大半はあらゆる商品を扱う「雑貨商」、いわば総合商社であり、歐米の各種メーカー・汽船会社・保険会社などの代理店を兼ねていた。資金力以上に、豊富な商品知識や貿易実

務をこなす能力が成功の条件だったのではないか。

雪景色の居留地本町通り  
明治7年(1874)頃。78番(左)、28番(右)付近。  
現在の中華街東門からサテライト・ホテルのあたり。



外国商館構内で生糸の荷造り



輸出の中心となつたのは、なんといつても明治時代の横浜港の二大輸出品、生糸と茶を扱う商社で、前者ではスイス系の商社が有力だった。そのうちでも最大手のシーベル&ブレンワルトとバヴィエル商会の商標が展示されている。前者の商標は、福島県掛田地方と甲州の生糸に付されたもので、産地で日本の製造業者が付けた商標は、外国商社が種類別に集めて梱包しなお際に剥がされ、このような外国商館の商標に張り換えられていたらしい。外国商館による生糸輸出の光景は、「生糸と絹物の輸出商」というコーナーに展示されている絵や写真からも彷彿とする。

英國系ではストラチャン商会の商標が展示されている。生糸も茶も、明治時代には主としてアメリカ向けだが、輸出に従事した商社の国籍はまちまちだった。商標が展示されている製茶輸出商社のうち、スマス・ベーカー商会はアメリカ系だが、フレーザー・ファーリー&ヴァーナムはイギリス系、ハイネマン商会はドイツ系である。これも「製茶の輸出商」というコーナーと合わせてご覧いただきたい。

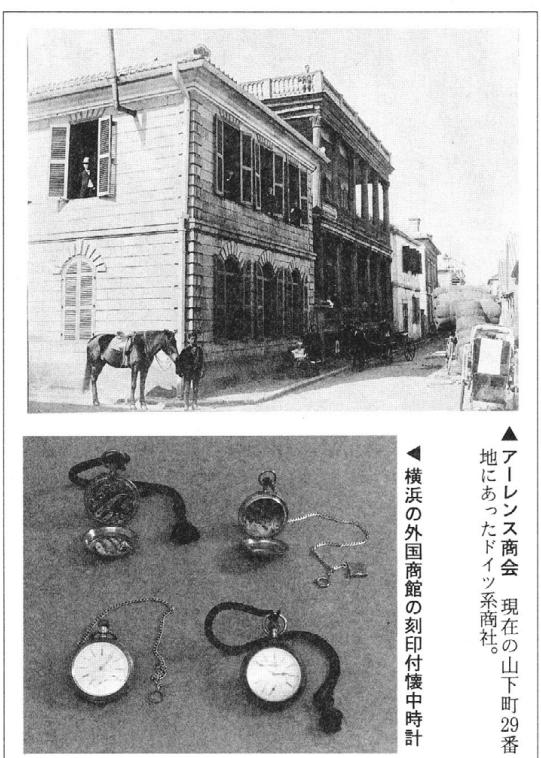
輸入品のうち薬品や染料は主としてドイツ系商社が扱っていた。それらのうちアーレンス商会、グロッサー商会、シモン・エヴァース商会の商標を展示する。関連資料は「飲食料品や薬品・染料などの輸入商」のコ

## 横浜の外国商館の刻印付懐中時計

中国人の商社も、中国本土や東南アジア各地に張りめぐらされた華僑のネットワークを生かして、海産物や砂糖の輸出入に活躍したが、ここではマッチの輸出に使われた瑞記とHung Tai & Co. の商標を展示している。これについても「中国人商人たち」というコーナーと合わせてご覧いただきたい。

この度、懐中時計のコレクターである江口茂氏より、今回の展示に向けて、こうした時計を寄贈していただいた。裏蓋の裏面の刻印から判明する商社名は以下のとおり。

スイス系一ファベル・ブラン (五個)、ショミット商会 (三個)、コロン商会 (三個)、ワーゲン兄弟商会 (一個)、ハーブ商会 (一個)、ドイツ系一レツ商会 (三個)、イギリス系一レツ商会 (三個)、エストマン商会 (一個)、アメリカ系一ブルール兄弟商会 (四個)、ウイットコフスキーベル商会 (一個)



▲横浜の外国商館の刻印付懐中時計

地にあったドイツ系商社。現在の山下町29番

個)

なかでもファーヴル・ブラントは、明治初期に横浜の町会所や郵便局、東京の医学校をはじめ、各地の時計塔に時計を設置したほか、日本人時計師のスイスへの留学を斡旋するなど、江口氏からは、ファーヴル・ブラントが時計知識の普及のために出版した木版の『時計心得草』(明治10年)や、田中時計本舗の出版になる『時計定価一覧表 付取扱心得書』(明治3年)も寄贈していただいた。これらも合わせて展示する。

その他、今回の展示には、外国商館の定款、帳簿、商用書簡、カタログやチラシ、ポスターなど、その活動の様子を知ることのできる資料を展示する。文献資料としては、外国商館の社史のほか、当館所蔵の日本関係洋書コレクションのうちブライアン文庫から、ケリー&ウォルシュ横浜店(本店は上海)発行の語学書、観光案内書、旅行記、日本文化の紹介書など、一五冊を紹介する。また、「外国商館で働く日本人」のコーナーでは、いわゆる「商館番頭」や茶の再製工場、造船・鉄工所で働く日本人の姿、かれらのために発行された語学書などを紹介する。

なお、外国商館の建物に関する絵や写真の画像情報を、会場に備えたパソコンで検索・閲覧できるようになつた。

(斎藤多喜夫)

# 三代茂木惣兵衛の夢と挫折

開港以来、原商店とならんと横浜の生糸貿易の二大巨頭であった茂木合名会社が、一九二〇年（大正九）恐慌で、機関銀行の七十四銀行とともに破綻したことはよく知られている。その後、茂木家の屋号である「野沢屋」は、暖簾の消失を惜しんだ横浜の絹物商の亀井信次郎と茂木家の親戚である名古屋の有力呉服商瀧定助によって、野沢屋百貨店に引き継がれ、戦後も横浜松坂屋に改名するまで、横浜市民に親しまれた。

恐慌当時、茂木合名を率いていたのは、弱冠二八才の三代茂木惣兵衛である。三代惣兵衛は、先代二代茂木保平の長男良太郎として、一八九年（明治四三）名古屋の第八高等学校に入学したが、その二年後の一二年（大正元）に父保平が急逝し、良太郎は学業の途中で茂木家の事業を継承、三代惣兵衛を名乗った。合名会社茂木商店・野沢屋輸出店・野沢屋呉服店・野沢屋絹商店・茂木土地部・茂木銀行は、「茂木の六大事業」といわれていた。惣兵衛は翌三年（大正二）六月、茂木商店・輸出店・呉服店・絹商店に、野沢屋輸入部を加えた五事業を合併して、茂木合名会社を設立した。第一次大戦の勃発により生じた一四・一五年の蚕糸不況のなかで、第一次帝国蚕糸株式会社が設立され、惣兵衛は副社長として蚕糸救済事業を担つた。アメリカの好景気に支えられて生糸輸出が好調に転じたのち、一六年（大

正五）七月茂木合名は大阪支店を開設し、綿花・綿布の取引に乗り出し始めた。また同月茂木鉱業部を設置し、亞鉛・銅の採掘・亞鉛の精錬を開始した。茂木の多角化が大戦景気を背景にこのころより加速する。翌一七年三月には、大阪支店の出張所として茂木洋行を上海に設立して、大陸進出の足掛かりとした。五月東京支店を開設し、各種直輸入業務を開始した。六月には茂木商工部を設置して、鉱業部に所属していた横須賀鉄工所を移管し、機械製造に乗り出している。翌一八年八月にはいずれも茂木の機関銀行であった茂木銀行と横浜七十四銀行が合併し、七十四銀行が設立され、惣兵衛は頭取に就任した。

このように多角経営に邁進した茂木の事業であったが、一九二〇年恐慌をむかえる直前の組織は、下図のとおりである。

このような茂木の積極的な事業展開は、「西の伊藤忠兵衛、東の茂木惣兵衛」とも、「三井物産を凌駕せん」とも称された。しかしその経営の蹉跌は、一九二〇年三月からの恐慌とともに到来した。

一七年秋、茂木合名大阪支店は綿布の投機に失敗して数百万円の損失をみているが、二〇年恐慌による経営破綻の引き金も大阪支店による綿糸投機・薄荷の輸出の失敗にあった。恐慌当初は、井上準之助日銀総裁の後ろ盾もあり、茂木合名の経営に対する樂觀論があつたが、五月一四日

のもので学究生活にはいった。

今日惣兵衛の警咳に接した方々は

少なくなっている。名古屋の瀧定株式会社の相談役瀧潤次郎氏によれば、

会社破綻後の惣兵衛への経済的支援は叔父の瀧定助がおこなつたという。

また、惣兵衛の実弟である茂木泰次郎の末亡人茂木昌子氏は、泰次郎氏は兄の渡英中、学生でありながら借金を督促する者に追われたこともあつたと聞いている。茂木家の財産の整理は、ほぼ一六年を要して一九三六年（昭和一）八月に完了した。惣兵衛は三三年一月帰国。三五年四月に四三才でこの世を去っていた。

惣兵衛は自らの事業について「茂木の没落」と題する一編の回顧録を残したが、彼自身は貿易業の合理的組織化による「完全な人間関係、経済関係」の確立や、組合長でもある日本輸出絹物同業組合連合会の八時間労働制の決議などにみられるよ

うな社会改良が夢であり、その意味で学究的ではあった。しかしその事業は空前の好況と恐慌のなかで潰えた。初代惣兵衛から続いた茂木家三代の事業は、後年横浜経済の繁榮とその散華を象徴するものとして語りつがれることとなった。（以上の記述は、上山和雄「破綻した横浜の『総合商社』『横浜の近代』（一九九七）所収、山口和雄『流通の経営史』（一九八九）、『茂木惣兵衛遺文集』（一九六六）、雑誌『シルク』『実業の横浜』『実業の世界』『東京経済雑誌』によつた）

## 茂木總本店（東京）

茂木合名会社（生糸元込・貿易）

【支店】大阪・東京

【国内出張所】七カ所

【海外支店・出張所】一九カ所

## 七十四銀行

## 茂木製糸部

三龍社、信勝社、龍興社など。

## 茂木呉服部

## 茂木地所部

## 茂木鉱業部

国内に七鉱山（亞鉛・銅）

## 茂木商工部

東西製作所（電気・一般機械）、

大平績（綿糸紡績）、広狭化

学（織品）など

## 茂木船舶部

## 茂木企業部

## 横浜最初の都市計画

直弼であり、この記録も勘定組頭から始まり、勘定組頭は彦部藩主井伊直弼に提出されたものと思われる。記録は勘定組頭が一〇月二四日に川崎宿に宿泊するところから始まり、勘定組頭が外国奉行と協議しながら市街地建設計画を作っていく様子が克明に記されている。この記録は、管見の限りでは建設計画について記した最も早い段階のものである。

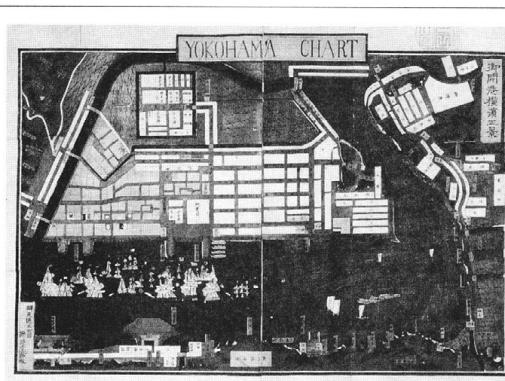
具体的に記録を見てみよう。建設予定地の視察は翌三五日から始まり、勘定組頭は外国奉行・日付とともに芝生村から戸部村（現在の西区一帯）を歩いている。視察の第一の目的は神奈川宿から横浜市（開港場）に至る新道をどこに作るかを検討することである。

は幕府の役人（勘定組頭）が安政五年一〇月下旬に横浜村と周辺地域を視察した際に記した記録を見ることができた。この記録には具体的に市街地の建設計画が記されている。そこで、ここでは勘定組頭の記録をもとに、横浜最初の都市計画案を眺めてみたい。

この記録は彦根城博物館（滋賀県彦根市）が所蔵する井伊家文書に含まれる。筆者は同博物館の御好意により同記録を閲覧させていただいた。

横浜最初の市街地は安政六年（一八五九）六月の開港に先立ち、幕府の計画に基づいて建設された。市街地建設の経過については、既に『横浜市史』第二卷一九五頁（二一七百四）に詳しい考察があるが、今回、筆者

と/or にあつた。この時、勘定組頭は「兼て見込書認め」と述べているから話題になっていたようである。また、記録には帷子川沿いに新道を作るとあるから、芝生村から開港場へ続く新道のルートは一〇月下旬には決まっていたことになる。



文久3年（1863）頃の横浜市街地

で観察を行なったが、後に、横浜村の内部で出た結果、再度、横浜村の視察を行なうことになった。また、市街地のあり方については、運上所を境とし一方を「異国人町」、一方を「日本人町」にするのが良いとするから、この段階で市街地の基本的な形が決められることになる。さらに、協議の中で、井上は

地に見分し、波止場・番所・運上所・「異国人町」・「日本人町」の場所割を実施している。また、「絵図面で取調べ」とあるから、具体的な図面が作成されたようである。

その後、勘定組頭の一行為北方村（中区）に向かい、この場所が東京湾を一望できることを確認し「遠慮番所」を設置することを協議している。また、本牧本郷村（中区）の二天と呼ばれる所も「見張り所」に適していると述べている。

さらに、この記録には戸部村が神奈川奉行所の設置場所に適していることや「遊女町」の設置場所についても記されている。

て運上所を木戸の代わりとして機能させることが決められた。一方、居留地の広さについては勘定組頭が一万坪の広さを予定したいと述べたところ、井上は信濃守が一万坪では不足するであろうと答えたとある。この時、井上は一ヵ国に付、「コンシユル館」五百坪、「町屋」五百坪で合計千坪となり、一万坪では十ヵ国分にしかならないと述べているから、井上は十ヵ国以上の国々に

ているから、井上は十カ国以上の國々と交易することを想定していたことになる。また、井上は横浜最寄の地に「馬場」を作り外国人に提供する必要があると述べている。

こうして外國奉行との協議を経て、勘定組頭は翌日、横浜村の視察を実行なつてゐる。記録によれば、勘定組頭は横浜村の「地所の高低」を審

地に見分し、波止場・番所・運上所・「異国人町」・「日本人町」の場所割を実施している。また、「絵図面で取調べ」とあるから、具体的な図面が作成されたようである。

その後、勘定組頭の一一行は北方村・奈川奉行所の設置場所に適していることや「遊女町」の設置場所についても記されている。

このように眺めてみると、安政五年一〇月下旬には、外国奉行と勘定組頭との間で市街地のあり方が決められつあったことが判明する。アメリカ総領事のハリスが開港場の建設予定地を視察するため神奈川宿と周辺地域を訪れたのは安政五年一二月一八日であり、幕府とハリスが居留地の場所などについて協議を始めたのは安政六年に入つてからであったが、幕府内部では、早い段階から市街地の建設計画が着々と進められたと言つてもよいのかも知れない。

(彦根城博物館の調査は横浜近世中研究会との合同で実施した。また、調査に際しては彦根城博物館史料室の学芸員の方々に大変お世話になつた。横浜近世史研究会と彦根城博物館史料室に紙上を借りてお礼を申し上げたい。)





## 閲覧室から

今回は、横浜で発行された日本語新聞のうち、昨年度複製したもの三紙紹介したいと思います。いずれも原紙がほとんど残っていない貴重なもので、発行部数、終刊年など不明な点が多く、原紙の発見が待たれます。

## 『日本実業新聞』

『寸鉄新報』の経営に携わっていた服部一郎が、明治四〇年一月一六日に創刊した新聞。発行所は、中村町の日本実業新聞社になっている。

一号は一二頁だけで、一面は「発刊の辞」のほか、川俣綱布整練株式会社長忽那惟次郎の紹介記事で構成されている。二面以下は鶴屋呉服店の営業ぶり、虎列刺の予防についてなどの「雑録」、中沢商会主中沢幾太郎や野方内科医院長野方次郎の談話ををせた「名家談叢」、織物の輸出入や各港の外國貿易などの記事で構成された「実業界」、発刊の祝辞などとなっている。

複製は、明治四〇年一〇月一六日（一号）から同年一二月二二日（五号）までである。一号以降は四頁だ

てになる。

『美名登新聞』

『京浜新聞』に携わった中藤次郎が、明治三五年（一〇月）に創刊した旬刊の新聞。発行所は、橋樹郡保土ヶ谷町の美名登新聞社になつてゐる。同紙はほどなく日刊になり、明治三七年四月に廃刊したようだ。

一号は八頁だけで、一面は党派に偏らない公明正大をうたった「発刊の辞」のほか、『京浜新聞』、『横浜貿易新聞』、『横浜新報』、『内外商事週報』の特色などを論じた「横浜の新聞紙」、小島鳥水、磯萍水、山崎紫紅を紹介した「横浜の文士」といった記事、短編小説で構成されている。また、毎号もしくは一二三号ごとに絵付録を添え、実業家にむけては広告掲載の効用を説くなど、読者と資金の獲得に留意している。

複製は、一号のみで、残念ながら付録が欠けている。

『横浜新火曜』

恩田栄次郎が、明治三八年一月『火曜新聞』として発行した週刊の新聞が廃刊し、同年八月に再び旬刊で発行したもの。後に『横浜新聞』と改題する。発行所は、野毛町の横浜新火曜社となっている。

複製は、明治三八年一〇月一五日発行の八号のみで、四頁だけになつておらず、一面は日露講和条約調印後に来浜した英國、米国との同盟国艦隊についての社説および歓迎会や観艦式の模様、詞壇、小説で構成されている。

以上の新聞の原紙は、全て東京大学法學部附属近代日本法政史料センター（明治新聞雑誌文庫）が所蔵している。

（上田由美）

## 資料だより

1615点（青葉区住子田 岡信孝氏）

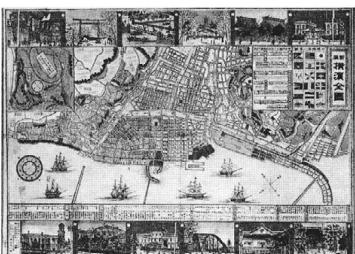
（5）横浜開港50年祭記念絵葉書 5点（鎌倉市玉繩 小坂傳二郎氏）

（6）横浜の外国商館が発売した懐中時計ほか 45点（保土ヶ谷区西谷 江口茂氏）

## 「横浜の外国商館」展記念講演会

▽日時／12月13日(土)午後2時から4時半まで  
(午後1時半開場) ▽会場／横浜シンポジア(産業貿易センターB1F 9階、JR・市営地下鉄「関内」駅から徒歩15分) ▽講師および演題／吉村昭(作家)「生麦事件について」、斎藤多喜夫(当館調査研究員)「横浜の外国商館について」

▽受講料／500円(展示観覧料含む) ▽募集人員／先着250名、受講希望者は往復はがきに住所・氏名・電話番号を明記のうえ、お申し込みください。11月20日より受付。▽申し込み先・問い合わせ／〒231 横浜市中区日本大通3横浜開港資料館講演会係 ☎ 045 (201) 2100



▲復刻版「新撰横浜全図」(倉田太一郎刊、明治28年再版)

官公署などの建造物や名所の銅版画をはじめ、また、色彩も美しくした地図は明治20年代に多く出版されたが、この「新撰横浜全図」はなかでも代表的なものである。1枚700円(本体価格)当館・受付で販売

- (3)『蚕糸之横浜』(横浜蚕糸貿易商同業組合 大正15年刊)ほか 2点(保土ヶ谷区月見台 渡辺慎吉氏)  
(4)明治時代の新聞・雑誌・浮世絵など

## ▼展示

- (1)「横浜の外国商館—貿易商社の源流」  
10/29(木)～2/1(日) 幕末から明治期を通して、横浜港貿易に大きな力を持っていた外国商館について、さまざまな資料により、経営者や活動の実際、日本人商人との関係などを紹介します。  
(2)「館蔵資料展 横浜の近代—PART IV—」  
(仮称) 2/4(木)～4/26(日) 開港期から明治大正期にいたる横浜の歴史を、当館所蔵のその時々の姿を表現する特徴的な資料によって紹介します。

## ▼講座

- 前期 平成10年1/24・1/31・2/7・2/14・  
2/21、後期 2/28・3/7・3/14・3/21・  
3/28 いずれも土曜日、午後2時から  
(1時30分開場、2時開講) 会場 当館講堂  
講師は当館調査研究員でテーマは未定  
(「広報よこはま」12月号に掲載予定)。受  
講料 各期2,500円 募集人員 各期50名  
(往復葉書でお申し込みください。前期か  
後期かも明記のこと)

## ▼寄贈資料

- (1) 中村家文書(享保年間～大正年間)  
128点(神奈川区中丸瀬野泰光氏)  
(2) 住友ペーパーライト社史ほか 26点(東  
京都文京区小日向 河井志郎氏)